

九州工業大学情報工学部における新修外国語 (ドイツ語, フランス語, 中国語)の授業 及び学生アンケートについて

—新カリキュラムの現状報告

栗山次郎, 市田せつ子, 石橋邦俊

The reconstruction of the second foreign language classes
(German, French, Chinese) at KIT, Iizuka
and an analysis of students' attitude toward them.

Jiro KURIYAMA, Setsuko ICHIDA, and Kunitoshi ISHIBASHI

1 はじめに

1991年7月に施行された新しい大学設置基準の改訂を機に, 九州工業大学情報工学部では大幅なカリキュラム改訂が行われ, 1993年4月の新入生から適用されてきた。その一環として当学部における新修外国語の学習も大きく変わった。

本稿はその新カリキュラムのうち新修外国語全般に関して,

- (1) 目的と改良点
- (2) 「学生に対するアンケート」を行う観点
- (3) 学生アンケートの実施とその結果
- (4) 今後の問題点

を述べる。

これは本学部における新修外国語カリキュラムの実態報告であると共に, 現在本学部で行われようとしている自己点検, 自己評価に一つの資料を提供しようとするものである^(注1)。

当学部では1986年の設置（学生受け入れ開始は1987年）以来、英語以外の外国語としてはドイツ語のみが開講されていた。その単位数は、90分授業15回を1単位として、4単位が必修であった。学生は文法クラスを週に1回1年間、読本クラスを同じく週に1回1年間受講していた。文法クラスと読本クラスは別の教師がそれぞれの教育方針、教科書に基づいて行っていた。必修単位は1年間の履修で終了するので、2、3年生に向けては選択科目としてドイツ語中級、ドイツ語上級を開講していた。

この開講方式はドイツ語を読んで理解するには適した方法であり、大きな効果を発揮していた。しかしドイツ語を聞き、話し、直接顔を見ながらコミュニケーションを深める技能を習得するには適した方法ではなかった。それを改善する観点を軸として新修外国語のカリキュラム改訂は構想された。

2 新カリキュラムにおける新修外国語学習の改善点

新カリキュラムにおいてはドイツ語に加え、フランス語と中国語が開講されることとなった。この3カ国語を新修外国語と呼ぶことにする。情報工学部全体のカリキュラムの中でこの新修外国語の占める位置は次のようになった。

卒業必要単位は127単位であり、それは対象分野科目、情報科目、自然科学科目、人間科学科目という四つの大きな科目群より構成されている。

人間科学科目は必修27単位で、それは人文社会系、言語系、健康科学系の三系を含んでいる。それぞれの必修単位は12、10、5である。

言語系は英語、新修外国語、日本語表現技法の三分野よりなり、必修単位は英語4、新修外国語2である。言語系必修単位10から英語4、新修外国語2を引いた残り4単位は上記3分野のどこから受講しても良い（ただし英語は総計6単位以内とする）。

このような位置を占める新修外国語に関しては、

- A) 「必修」時間と「選択」時間の性格を明確にする
- B) 受講外国語の多様化をはかる

- C) 少人数クラスを導入する
- D) 学習内容と授業方法を転換する
- E) 短期集中的な学習により、効果的な外国語学習を行う
- F) ネイティブスピーカによる授業を導入する
- G) 自己点検を実施する

などの改善を行った。

以下でそれぞれの項目について簡単に説明を加えるが、これらはいずれも学部全体のカリキュラム改訂がなされようとしていた時期に、各学科の代表者と（新修外国語担当者を含む）人間科学科目担当者との討議、討論を背景として実現した改訂であることを付言しておきたい。

A) 「必修」と「選択」

ある教科内容の重要な部分を「必修」として全ての学生に課す事は、多くの場合十分に納得できる方針である。しかし学生は限られた単位数の中で、多様な教科を習得しなければならない。特に理系学部においては習得しなければならない知識、技能が多方面に及んでいる。そのような中で学生に「必修」として課すのは、さまざまな能力を習得する上で基本となるスキルを身につける範囲に限るべきではないかと思われる。ある分野におけるある程度の能力と知識を与える授業をすべて「必修」として囲い込んでいけば、全単位数は限られているのであるから、他の分野は開講できない状況も想定される。

それ故に習得すべき基本的なスキルの範囲を「必修」として課したうえで、その科目に関してそれ以上のスキルを自分の意志によって伸ばしたい学生には、その教科を学ぶチャンスが大学はできるだけ与えるが、それは言わば「選択科目」として学生の意向や意志に任せるべきであろう。このように考えれば、いくつかの分野をまとめて一つのグループを形成し、その中から一定の単位を履修する「選択必修」の考え方は、優れた対処法だと言える。

外国語学習の一つの目的は、コミュニケーションの道具としての外国語習得である。また、現在の社会や企業の国際化、卒業生の海外赴任の可能性などを

考えると英語以外の外国語になじみ、外国語自体に対する抵抗感や違和感を少なくすると共に、情報発信者としての基礎となる（言語使用上の）センスを磨く訓練もしておかなければならない。

「必修」の範囲、対象を広げた外国語学習の必要性というこの二つの理由から、英語以外の一つの外国語の核となる部分を「必修」として習得させ、それを越えた基本的な部分（と言っても、この部分も「核」なのだとする考えもあるが）は「選択必修」として、さらにその上は「選択」として習得できるチャンスを与える方針で新修外国語は出発した。

ごく初歩的な例で言えば、「コンニチハ、マッツ サン」と言いたいときに、「グッド モーニング、ミスター マッツ」と言って通じる相手もあるが、「ゲーテン モルゲン、フラオ マッツ」とか「ボン ジュール、マドモワゼル マッツ」とか「ブエノス ディアス、セニョラ マッツ」とか「アンニョン ハシムニカ、マッツ シ」とか「スラマ シアン、パ マッツ」と言って初めてコミュニケーションの第一歩が始まる場合もある。

コミュニケーションの道具としての外国のきわめて基礎的な部分を「必修」の時間で練習する。ここを習得した後に更にその言語に関するスキルを深めたい学生は、その言語の「選択」授業を履修する。一つの言語の基本部分を学習したうえで、他の言語の基本的なスキルを習得したい学生は、他の言語の「必修」授業を履修する。人間科学科目10単位の中で、必修は6単位とし、選択4単位を認めたのはこの趣旨からして一つの判断であった。

B) 履修外国語の幅を広げる

旧カリキュラムでは第二外国語としてはドイツ語のみが開講されていた。学生の関心や外国文化との接触チャンスを考えれば、これは外国語学習としては一面的過ぎると思われた。

しかしどの言語を開講するかについては、さまざまな判断がある。国連の公用語を中心にすれば、英語以外にフランス語、ロシア語、中国語、スペイン語などがあるし、近隣諸国語を学ぶべきだとすれば、中国語、韓国・朝鮮語以外

に東南アジア諸国語が挙げられる。ヨーロッパ文化と接する機会が多い事実を考えると、ドイツ語、フランス語、イタリア語などが挙げられる。

継続的に開講する方針を尊重すれば、(非常勤講師を含めた)教授者と受講者(学生の意向)が確保できることを判断の基準として考えなければならない。毎年受講生が少ない言語の開講は避けるべきであるし、教授者を継続的に確保し難しい言語も開講できない。教授者の確保には、飯塚という情報工学部の立地条件も考慮しておかなければならない。

これらの条件から、新カリキュラムにはフランス語と中国語を加えることとした。日本独文学会ドイツ語教育部会アンケート委員会による調査(1991年12月実施)においても「第二外国語として開講されている外国語」リストの1位はドイツ語、2位はフランス語、3位は中国語であることを見ても^(注2)、現在で開講する新修外国語としては妥当なもの判断される。

履修外国語の決定は、新入生に入学後のガイダンスにおいて各言語の位置、授業方法などを詳しく説明した上での希望調査を基として行っている。2年間を平均すれば、第一希望にドイツ語を挙げた学生は約60%、フランス語を挙げた学生は20%弱、中国語を挙げた学生は20%強である。

C) 少人数クラスの導入

一クラスの適正規模は学習内容、学生の知識水準、授業方法などによって異なるが、旧カリキュラムではドイツ語の授業は一クラス40~45人規模で行われていた。前年度の未履修者を加えると50名を越すこともあった。これではいわゆる文法知識を十分に教えるのにも多すぎた。コミュニケーションの基本的なスキルを習得するという新カリキュラムの意図からすれば、一クラスの人数は30人前後が限度だろうと判断されていた。

人間科学科目担当者以外の教官を含めたいろいろな段階での討論を経て、英語と新修外国語の授業は少人数教育(30人規模)で行うことが決定された。これは((B)に見た「履修外国語の幅の広がり」と合わせて)理系の学部としては、大きな、そして優れた決断であったと言える。

なお(B)で述べたように、新修外国語の履修には学生の希望を優先させている。だから、「適正規模は30人ですから、31人目からは他の言語を履修してください」とは言えない実状がある。またカリキュラム編成上複数学科にまたがって授業枠を組まなければならない現実もある。そして現有スタッフは限られているし、非常勤講師も欲しいだけ依頼できるわけではない。これらの理由から、現在は「最低30人、多くて40人」を目処にして一クラスを構成している。しかし現実には一クラス40人を越える場合も出ている。

D) 学習内容と授業方法の転換

旧カリキュラムのドイツ語では4単位を二分し、「文法」を2単位、「読本」を2単位取得することになっていた。新カリキュラムでは必修2単位となったのにともない、学習内容を再検討し、大幅に転換した。その授業形態も効率化した。

先ず新修外国語学習の目的を、日常的な場面でのコミュニケーションをスムーズに行えるような(当該言語の)スキルを習得し、ひいては言語行動上のセンスを磨くところにおいた。

一般的に言えば、外国語学習の目的は、

- ・その言語を聞き、話し、読み、書く四つの能力を習得し、
- ・その言語と深く結びついている文化を知り、
- ・言語行動上のセンスを磨く

ところにある。

旧カリキュラムでは、外国語を読み、その言語で書かれた文書を通して文化や科学に接する点に学習の主眼をおいていた。今回のカリキュラム改訂を機に、聞いて話す能力を習得し、目の前にいる生身の外国人とコミュニケーションできるセンスを育てるところに重点を移した。

文字を見て、その内容を頭の中で組み立てるプロセスをではなく、生のもの(またはその絵、写真、ビデオ、図や表など)を見て、それを示す音声を経験し、それに関する自分の知識や能力や判断を目の前の人に伝えられる能力を育てるプロセスを目指した^(注3)。このような「発信型」の外国語授業を進める

九州工業大学情報工学部における新修外国語の授業及び学生アンケートについて 47
中で、ビデオ、LL教室、写真、絵、図や表を使用する授業が増加した。

E) 短期集中型語学学習の導入

語学の学習では、たとえ短期間であっても、毎日その言語に接するのが効果的であることは広く認められている。大学における語学の学習にしても、辞書を引きながら長い文章を解説していく、いわゆる講読の授業では、長い書かれた文章を理解し、内容を把握するプロセス（復習と予習）が必要である。それであれば一週間に一度の授業でもかなりの効果が期待できた。しかし発信型の授業では、聞く、話す練習が中心となるので、一週間間隔では記憶に残る割合が少なく、授業中に復習のために費やす時間が多くなってしまふ。「発信型コミュニケーション」授業ではある程度の集中的学習が望ましいのである。

情報工学部での1993年度からのカリキュラム改訂に際しては、セメスター制を採用した。それまでの通年単位制は廃止され、すべての授業において学期単位制とされた。これは新修外国語にとって非常に好都合であった。必修2単位を前期または後期で履修することが制度的に可能となったのである。それによって外国語学習における短期集中制が部分的に可能となった。学生は週2回同じ教師から、または教師は違っても同じ教科書を使って同じ方針で授業を受けることになった。

これにより(D)で述べた、学習内容の転換もより効果的なものとなった。

F) ネイティブスピーカーによる授業を広げた

ネイティブスピーカーによる外国語授業は今では中学校での英語教育でも広く行われている。新修外国語では、新しい言語については何の知識を持たない学生が受講生なので、学生の動機付け、込み入った説明、素朴な質問などに対処するには日本人教師が主導権を持つべきである。しかし語彙や表現を増やしたり、的確な文章を適宜例示したりするにはネイティブスピーカの役割は大きい。この二つをうまくマッチさせるにはかなりの程度まで日本語を解するネイティブスピーカーと日本人教師との共同作業が望ましい。

今回のカリキュラム改訂では、(E)で述べたように、週二回の授業のうち一回は日本人教師が、一回はネイティブスピーカーが担当するのが可能となった。文部省に対しては外国人専任教師の要求を毎年出しているが、まだ実現していない。そして情報工学部の立地条件の故に、外国人非常勤教師を確保するのが簡単ではないが、現在では中国語においてこの方針は実現している。

G) 自己点検の実施

今まで述べてきた新カリキュラムの改善点の実効を挙げているか、更に改良を重ねるにはどの点を重点的に取り上げれば良いか等は日頃の授業、テストでの成績によりある程度までは探ることができる。しかし全体的な傾向を知るには受講生全体に対するアンケートが有効な手段である。

この観点から新修外国語担当者は1993年度前期、1994年度前期の二度にわたって、学生へのアンケートを実施した。前期だけ実施したのは「必修」部分での大方の傾向を知るためである。

これについては次節で詳しく述べる。

3 学生に対してアンケートを行う趣旨

1991年7月より施行された大学設置基準の第2条では、「大学は……教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行う」よう努めることが求められている。新しい設置基準の基底とも言うべき「大学審議会」の1991年2月の答申「大学教育の改善について」には、この自己点検、自己評価の項目の例が示されている。その一項に「教授方法の工夫・研究」が挙げられ、その内容として、「教授方法の工夫・研究のための取り組み」と「教員の教育活動に対する評価の工夫（学生による授業評価など）」が示されている。このような事情もあって、現在では「学生による授業評価」が広く論じられている^(注4)。

これはオランダやイギリスでも行われているが、日本では主としてアメリカからの情報によって広まってきた。現在はドイツの大学でも、中国の語学学校

でも（部分的であるが）行われている^(注5)。

「学生による授業評価」は、上記項目例での内容だけを読めば、あたかも教員の上に立つどこかのグループが強権的に個々の教員の教育活動を評価する手段として使用されるかのように見えるが、その見方は間違っている。授業評価は「教員を評価する」ところにその目的を持っているのではなく、「教員がよりよいティーチングをするための資料」である^(注6)。それ故にこれは、「個々の教員等についての勤務評定のようなものではない^(注7)、そのようなものとして使用されてはならない。本学部の部局評価委員会も同じ趣旨で自己点検・評価を進めている^(注8)。

「学生による授業評価」においては、学生にどのような範囲内で、どれくらいの判断能力があるのか、についても疑問がある。その反面、教授者自身が自分の受講生の受講意識を知り、授業方法を改善するヒントを得て、「教師としての資質向上」（注6に同じ）を図る一つの方法としては「学生評価」は有効である。教師が自分の教育活動の改善のために行う「学生による授業評価」は、授業改善を積極的に進めようとする教授者個人によって随時実施されるという性格のものである。毎年、同じ時期に、類似の調査項目によるアンケートを行うよりも、教師個人の授業形態、授業方針がある程度定着した折りとか、新しい試みに手をつける折りとかに行う方が効果的である。とは言え、アンケートの項目や処理には個人が随時実施するには幾分面倒な場面もある。そのために、アンケートの趣旨や目的を尊重しながら、一つのグループ、時には一つの学部、さらには大学全体などが組織的に行う「授業評価」も現在は行われている^(注9)。

また大学に求められている自己点検、自己評価のうち「教授方法の改善」に関するヒントは、上のように解された（教授者個人によって随時実施される）「学生による授業評価」から「のみ」得られるのではない。「学生による授業評価」は、一つの科目を担当する教授者グループ全体が学生の意識や意向、さらには理解度を考慮しながら全体として改善策を模索する際の一つの手段として「も」使用される。筆者達が目指したのはこれである。

ところが一般的にいえば、「教授者グループ」内部にはさまざまな教育観が

あり、教授者各自がそれぞれの教育方法を採用しているのが通例であり^(注10)、グループ全体としてアンケートを実施するしても、教授者個人が自分の授業でだけ行う場合のように簡単ではないし、または特定の項目に関してだけ行なうわけにはいかない。

さいわい本学部の新修外国語担当者全員はコミュニケーションな授業を行う点では一致していた。しかし授業方法はさまざまであった。教科書を使用せず、厚紙に絵をはった自作の教材で授業を進める人もいる。週のうち一回はLL教室でヴィジュアルな授業をし、他の一回は普通の教室で行い、一種の実験をしている人もいる。教科書を使用するにしても、ほとんど絵や図や表だけの本を使っている人もいる。週のうち一回は日本人が単語の意味や形態を教え、他の一回はネイティブスピーカーが発音や表現のヴァリエーションを中心にして進めているクラスもある。

このような実態を勘案し、新修外国語への参加意識、大まかな授業の雰囲気や満足度、初歩的な学習成果などを探るアンケートを一年生前期の新修外国語受講者全員に対して実施した。アンケートの項目に関しては、さまざまな大学、個人によって実施されている「学生による授業評価」に見るような前例はないので、ほとんど手探り状態であった。また筆者三人ともアンケートのとり方については素人なので、まだまだ改善されるべきアンケートではあるが、ささやかながら「コミュニケーション能力の養成を目指した発信型授業」改革の実態の一面として提示したい。

4 アンケートの結果とその評価

A) 旧カリキュラムでのドイツ語受講者の意識調査 (1991年度)

新カリキュラム作成に先だって、1991年6月に選択ドイツ語を履修している2・3年生を対象にアンケートを行った。旧カリキュラムにおいては、あるが、「選択」科目としてのドイツ語を履修している学生であるから、ドイツ語学習

にはかなりの意欲を持っている学生と見なして良い。彼らが1年次に履修した必修のドイツ語の授業を振り返ってみて、感想を述べさせたものである。

ここではその調査について部分的に述べる（回答者数81名）。

どのような外国語授業を望むかと言う質問には（複数回答）、ビデオや絵の教材使用を挙げたのが67名、会話授業を挙げたのが39名であった。ある程度は日常生活場面での会話的要素が盛り込まれている読本的授業を挙げた学生は15名いた。文法説明が望ましいとする学生も11名いる。いわゆる講読の授業を望む学生が10%程度いるが、多くはコミュニカティブ、ヴィジュアルな授業を求めていることが確認された。

B) 新カリキュラムでの新修外国語の授業に関するアンケート(1993, 94年度)

新カリキュラムの新しい授業内容・方法に学生たちはどのような反応を示したであろうか。私たちは、1993年度と94年度の前期終了時に新修外国語の必修授業（ドイツ語、フランス語、中国語の内から一つ選択）の履修者にアンケートを行い、大まかな方向を探った。ここでは、この二年間の調査に評価を加えたい。

アンケートの項目は2年とも同じである。94年度には項目を修正、追加することも考えたが、同じ項目でどのような相違があるかも見たいとして、変更しなかった。

アンケートの全文は本論文末に示した。

C) アンケートの結果と評価

1) 授業への出席率（質問項目5）

アンケートは新修外国語担当者（専任、非常勤）全員が、前期最終講義時に行った。回答者は93年度は406名、94年度は390名であった。今年度について言えば、1年生の総数が約450名であるから、最終授業に約15%が欠席していたことになる。1年生の段階で授業に出なくなる学生は約10%程度はいると言われているので、残りの約5%の学生がこの時間に偶然出席していなかったの

か、それともそもそも新修外国語への参加率が低いのかは決定できない。

先ず、一般に新修外国語の授業への出席率はどうなっているであろうか（毎時間出欠を確認している担当者は少ない）。これは質問5に対する回答で把握できる（表1と表2を参照）。

言語別	出席率				
	回答数	90%以上	70%	50%	30%以下
ドイツ語	204名	75%	19%	5%	1%
フランス語	128名	60%	31%	6%	3%
中国語	74名	75%	24%	1%	0%

表1 1993年度出席率

言語別	出席率				
	回答数	90%以上	70%	50%	30%以下
ドイツ語	196名	85%	14%	1%	0%
フランス語	114名	88%	9%	1%	2%
中国語	80名	75%	22%	1%	2%

表2 1994年度出席率

94年度について言えば、10%から20%の学生が出席率70%である。彼らは単位獲得のため、必要最低限の出席率は確保したいが、時々はさぼりたい、さぼって良いだろう、さぼっても大丈夫だ、と考えている。教師の側からすれば彼らは容易にお客さん、あるいはお客さんの予備軍になってしまう。つまり実践・練習を積み重ねる授業にあって、非常に消極的な態度で受講するグループを形成してしまうのである。

彼らをどのように授業に組み入れるかは大きな課題である。

2) 各項目への回答比率

次に全アンケート項目の結果を見るが、スペースの関係で、出席率90%以上

とした回答者が各項目に対してどのように評価しているか（A[強く質問のように思う], B[質問のように思う], C[判断できない], D[質問のように思わない], E[強く質問のように思わない]のどれを以て回答したか）のみを判断の対象とした。

出席率90%以上を示しても、3カ国語で2年間なので表が6つとなるが、それを参考のため本論文末にまとめて示した（但し中国語93年度分だけ、何らかの理由で何人かの回答者が回答をしていない項目があるので、比率を合計しても100%とはならない項目がある）。

3) 新修外国語とその他の授業との比較

授業への参加や理解度については適当な参照資料がなかったので、本学部全体との比較をする事にした。そのために授業全体への傾向も調査した。各科目では授業参加の確認をどの程度行っているかは不明であるし、新修外国語においても毎時間出席の確認を行っているわけではない。

6a の評価を見ると、評価のAとBを合わせれば80%以上なので、新修外国語の出席率は他の授業に比べれば高いことがわかる。

アンケートに現れた判断の根拠を少し述べてみよう。なお回答者の約90%が評価の理由を短く述べてくれた。

質問1（授業全般への出席）に対してはBと判断し、その理由として「前半あまり出席していなかったから」と挙げている。その同じ学生が質問6a（ドイツ語授業への出席）に対して、おなじくBと判断し、その理由として「一応全部出席しているので」と挙げている。普通に考えれば、質問1に対しては「前半余り出席していない」のでBとし、質問6aに対しては「全部出席している」のである（授業全般よりはよく出席しているわけだ）からAと判断しても良さそうである。

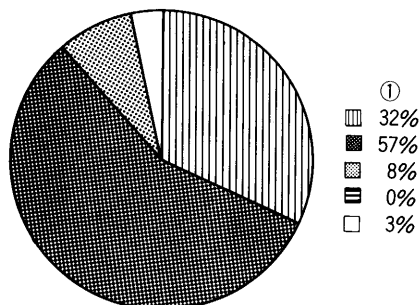
別の回答紙を見ると、質問1に対しては「当然やんかー」として、Aと評価している。質問6aに対しては「他の授業も出ていますから」としてDと評価している。この評価は質問者もよく理解できる。しかし評価の比率だけを示す

と、この回答はDとされる。それ故にこの項目に関して言えば、Dと評価した学生だから出席率が低いとは判断できないのである。

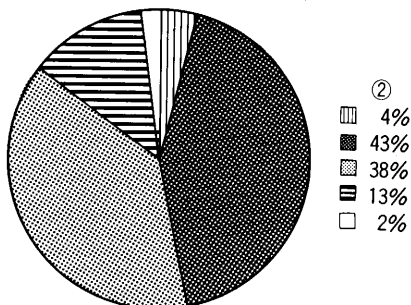
アンケートを一枚一枚見ていると、このような理解しにくかったり、アンケートの取り方について考えさせられる回答に出会うこともある。また全ての項目にCやDをずらりと並べている学生もいる。

これらの事実を参考にしながら、以下の比率は学生のおおまかな意向を反映したものと考えて頂きたい。

6b,c,d (理解し易さ, 満足度, 意義性判断) については、中国語の授業が他の科目に比較してきわめて良い評価を得ている。ドイツ語とフランス語については他の授業と大して変わらない。それをグラフでみると次のようになる(グラフ①, ②, ③)。

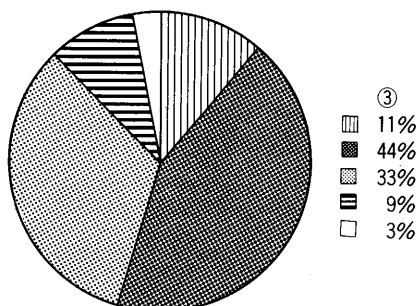


① 中国語, 94年度, 質問項目 6b



② フランス語, 94年度, 質問項目 6b

■ 回答A (積極的賛意)
 ■ 回答B (賛意)
 ■ 回答C (中間)
 ■ 回答D (否定的)
 □ 回答E (強く否定的)



③ ドイツ語, 94年度, 質問項目 6b

4) 授業の感想、学習の成果について

質問項目7から15までについての結果を評価する。

質問7, 9, 10は授業についての絶対評価である。評価のA（積極的賛意）とB（賛意）を合わせると、調査年度と学習言語によってばらつきはあるものの、概ねの学生は、学習言語について興味が深まった、授業が楽しかった、有意義だと思った、との感想を抱いている。

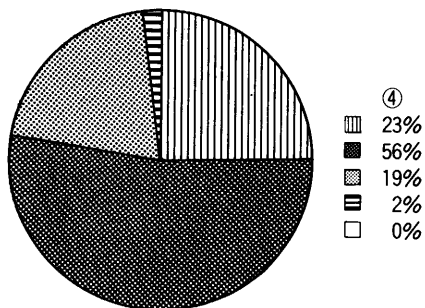
少しだけ寄り道をすると、一枚の回答では質問9（ドイツ語を楽しみましたか）に対して「楽しいと言うよりみになった」（回答のママ）と理由を挙げて、評価としてはDとしている。学生としては「楽しい」授業と「みになる」授業を区別しており、且つ別項（質問6dと質問10）の意義性に関しても評価はDとしているのであるから、教授者としては幾分複雑な気持ちになる。同じく質問9に対して「新しい知識は常に喜びを運ぶ—格言—」と理由を挙げ、評価はBの学生もいる。

アンケートでの評価に戻ると、質問項目11, 12においては学習成果について尋ねている。

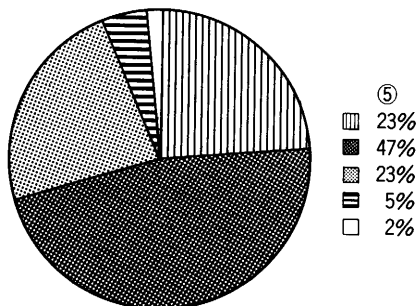
12については、概ね肯定的な回答が多数を占める。授業を離れても、学習言語についての効果が残っている。自分は、学習言語を理解し、少しは話せるというイメージが作られている。これは歓迎すべき成果である。

それに対して、「実際にネイティブスピーカーと話したいか」という趣旨の質問8に対しては、三つの言語とも否定的な回答が出ている。これは、学習言語を理解できるというイメージがイメージにとどまり、先へ進まない、ということの意味している。そしてこのような消極性は、単に外国語教育の充実に関わるのではなく、学生の幅広い視野と関心を育成するという、いわゆる社会の国際化の現実に立ち帰って捉えるべき問題であろう。

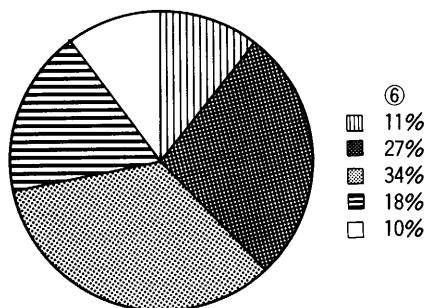
同じく学習成果を尋ねた質問項目13にも否定的な答が多く寄せられている。以下に比較のため、質問12について、ここ二年間の中国語（グラフ④、⑤）、質問13についてはここ二年間のドイツ語（グラフ⑥、⑦）と今年度の中国語（グラフ⑧）の回答分布を表示する。



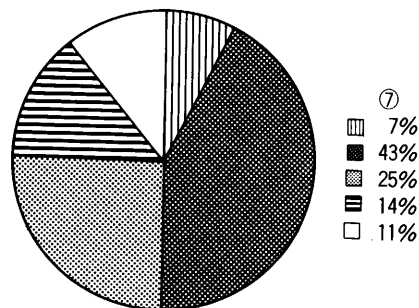
④ 中国語, 93年度, 質問項目 12



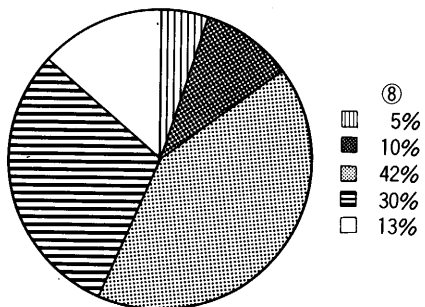
⑤ 中国語, 94年度, 質問項目 12



⑥ ドイツ語, 93年度, 質問項目 13



⑦ ドイツ語, 94年度, 質問項目 13



⑧ 中国語, 94年度, 質問項目 13

回答A (積極的賛意)
 回答B (賛意)
 回答C (中間)
 回答D (否定的)
 回答E (強く否定的)

質問12と13の結果は単に学習成果の異なる度合いというだけでは済まされな
い違いを含んでいる。挨拶（質問12）はいはば一つの簡単な反応として身につ
くが、自己紹介（質問13）をするためには、主語・述語を備えた文を形成しな
ければならない。

質問12, 13に関する自由記述を見ると、否定的な答を書いた理由として「恐
い」、「あがってしまう」、「自信がないから」というコメントが挙げられている。
さらに評価をCとしたうえで、その理由を「あいさつはできるが、あいさつす
る勇気がない」と端的に述べた学生もいる。外国語を、相手から示された行為
に対する反応としてはかろうじて話せるが、しかし自発的、自主的に話す事は
できないということであろうか。

一つの社会的な現象ではあるが、家庭内で「メシ」とか「フロ」とか「ウル
サイ」とか単語や単文でしか意志を表明しない若者が増えていると話題になっ
たことがある。質問12と13に対する回答にみられる相違はこのような傾向を反
映しているのかも知れない。ともあれ、社会生活をスムーズに送るうえで必要
な「言語行動上のセンスを磨く」と言う外国語学習の目的にそった授業方針が
ますます重要になって来ると思われる。

5) 授業内容への希望

授業内容への希望について述べさせる質問16と17では、1991年度のアンケー
ト同様、学生の多くが会話、ヒヤリング中心の授業を望んでいるとの結果が出
ている。新カリキュラムにおいて、会話中心の授業を導入した事はすでに述べ
たとおりである。会話学習では、パートナーと文を掛け合い、共に一つの状況
を作り上げる過程を学ぶわけであるから、ある典型的な状況に合わせた典型的
なパターンは、反応・反射として身につけることが出来る。自発的に外国語を
話す態度は、個別の状況に応じた対語能力と結びついている。パターン化され
た会話能力にとどまらない、広い意味での言語能力を育成する外国語学習を心
がける事で、豊かな会話に近づけると考えられる。

6) まとめ

他の授業と比較すれば出席率が良く、また授業内容や授業の進め方についても概ね好評といえるのに、学んだ言語を実際に話す意欲についての自己評価は低い。この点については、外国語は教室の外にあるという事実を絶えず学生に意識化させることで、学生の中に自信と意欲を生み出していきたいと思う。

5 おわりに

九州工業大学情報工学部において1993年度から行われたカリキュラム改訂の一環として実施されている新修外国語授業について、その趣旨や方針及び成果を学生アンケートを援用しながら述べてきた。

今後も教授者個人は、それぞれの授業の充実を目指して、現行制度内でさまざまな試みを行って行かなければならないが、(全国レベルでみても、そして部分的には本学部においても)新修外国語学習全体の問題として将来浮かび上がって来るであろう項目を以下に列挙して、報告を終えたい。

A) 外国人教師による授業の増加

当学部においては今までの経験からみて、適当な人材を得るのは簡単ではないが、機会あるごとに心がけておかなければならない点である。

B) 情報工学部にふさわしい教材の開発

「コミュニケーション能力の養成を目指した発信型授業」のために、担当者はそれぞれ工夫をしている点は前述した。現時点では「これは」と言うべき決定的なものは見つかっていないが、今後も説得力のある教材及び授業方法をさがして行かなければならない。

C) 能力別クラスの試行

現在は入学生の希望により履修外国語を決定し、その範囲内では学籍番号順

にクラス編成を行っている。少人数クラスをより効果的なものにするためには、学籍番号順編成という原則を変更し、別の方針を導入するのも一つの方法であろうと考えられる。しかしどのような方針と手段が適当であるかについてはまだ結論が出ていない。新修外国語においては全員が入学時点では同じ水準で授業をはじめるので、妥当な判断基準が見出し難いのである。

D) 45分授業の導入

現行90分授業を二分して、前半と後半を別な教師が担当する方法である。これは、教材、授業方法に関してだけでなく、進行に関しても担当者が十分に打ち合わせしたうえで、開始しなければならない。そうでなければ授業がうまくいかないだけでなく、担当者間にも思わぬ葛藤や対立が生じる可能性が大きい。

E) 学生の自力学習をサポートする体制

「基本的なスキル」を「必修」で、少し進んだ段階を「選択必修」で学習する体制については先述した。それ以上の段階になれば「選択」授業として二、三年生でも開講されているが、学生の新修外国語学習レベルがある程度に達したときには、学生が自分の自由な時間に合わせて、独力で学習できる体制が望ましい。しかし全国レベルにおいて新修外国語でのCALLについては大きな議論がなされていないのが実状である。

註

- 註1 本稿の骨子は表記三名の共同討論より生まれたものであるが、執筆に際しては、1, 2, 3, 5節を栗山が、4節は市田と石橋が担当した。
なお学生に対するアンケートの実施に際しては本学部に非常勤講師として新修外国語教育を担っていただいている（またはいただいていた）、福岡教育大学助教授堀口里志、ハッチャー・保子、山下哲雄（以上ドイツ語担当）、栗原好郎、梅津教孝、河野敦子、富田恭子（以上フランス語担当）、木村裕章、ハオ・ショウチン、オーヤン・ショウ（以上中国語担当）各氏の協力をいただいた。記して深謝いたします。
- 註2 田中慎也著『どこへ行く？大学の外国語教育』三修社、1994年、PP.148-。
- 註3 関口一郎氏は、「いわゆるくピーチクパーチク」の外国語会話も大学での外国語教育から排除されるべきではあるまいと述べている。これは新修外国語の学習においても配慮されるべき点であろう。と言っても本論の筆者は、書いたり読んだりする能力を軽視しているわけではない。制限された「必修」内では学習内容の転換が必要となってくるのである。
関口一郎編著『慶應湘南藤沢キャンパス・外国語教育への挑戦』三修社、1993年、pp.22- を参照。
- 註4 これに関する資料については枚挙に暇がないと言えるほどである。たとえば本論の筆者の一人栗山が参加した第43回九州地区大学一般教育研究協議会（1994年10月6, 7日、九州大学六本松地区）における重要なテーマの一つがこの授業評価であった。
- 註5 ドイツでの「学生評価」に関しては Spiegel Spezial Nr.3/1993 や Der Spiegel 15/1994 参照。後者においてはマンハイム大学での例を示して、「先駆的プロジェクトへの失望」について報告している。本論の筆者の一人栗山は（Der Spiegel 1994/15 にも引用されている）Rüdiger Preißer 氏がベルリン工科大学で行った（組織的にはドイツでは初めての）授業評価を紹介し、自分に対する「学生による授業評価の結果」を公表したことがある。Kuriyama, Jiro: Studentenevaluation als Norm für die Universitäten. In: Kairos. Nr. 30, pp.125-132, 1992。
中国に関しては、中国でドイツ語を教えていたドイツ人教師からの、同じく栗山宛私信による。
- 註6 高野二郎『大学の自己評価』（東海教育研究所発行「望星」1993年2月号所載）を参照。
- 註7 高等教育研究会編『大学の多様な発展を目指して III —設置基準の解説とQ & A—』ぎょうせい、1992年、P.2。これは、今回の大学設置基準の改正に関する文部省の立場であると考えられる。
- 註8 1994年3月31日 九州工業大学情報工学部部評価委員会
『平成5年度九州工業大学情報工学部自己点検・評価に関する報告書』を参照。
- 註9 註4で述べた研究協議会においてもこのような方針に基づいて実施されている福岡大学の例が示された。
- 註10 藤原書店編集部編『大学改革とは何か』藤原書店 1993年 PP.229- では二つ

の大学のフランス語担当者が「技術的な次元での」「改革論」と、「どんな科目」の教師でも「要するに本気でやればいい」のだと言う教育観について論じている。教授者間におけるこの程度の相違はどこでも存在するのであるが、それが一つのグループ内で顕在化したときは改革の進め方のような大きい事柄においてだけではなく、アンケート項目一つのような些細な事柄においてもなかなか合意に至らない事態が想定される。

資料 1 アンケート全文 (一部省略, 再編)

次の基準に従って A~E のいずれかを, 質問の後ろの () 内に, 記入してください。評価欄に示した様に評価した理由, またはコメントを評価欄の後ろの () 内に簡単に記載して下さい。

- A. 大いに質問の通りである B. だいたい質問の通りである
C. どちらとも言えない D. 質問の様には思わない
E. まったく質問の様には思わない

I. ドイツ語の授業以外の授業全般について

1. 授業によく出席していますか () ()
2. 授業をよく理解していますか () ()
3. 授業全般に満足していますか () ()
4. 授業は全体として有意義でしたか () ()

II. この授業について

5. この授業へのあなたの出席率は (適当な事項を○でかこんで下さい)
90%位 70%位 50%位 30%位 10%以下
6. 授業全般に対する I. での評価と比較して言えば,
a. ドイツ語の授業にはより多く出席していますか () ()
b. ドイツ語の授業は理解しやすかったと思いますか () ()
c. ドイツ語の授業にはより満足しましたか () ()
d. ドイツ語の授業はより有意義でしたか () ()

III. この授業の結果

7. ドイツ語に対する興味は深まりましたか () ()
8. 他の人がドイツ人と話しているのを見たとき, 自分も話してみようと言う気になりますか () ()
9. ドイツ語を勉強して楽しかったですか () ()
10. ドイツ語を勉強するのは有意義だと思いますか () ()
11. (テレビのコマーシャルやインタビュー等を聞いて) 「これはドイツ語だ」と分かったことがありますか () ()
12. ドイツ人と簡単な挨拶は出来ると思いますか () ()
13. ドイツ人に対して簡単な自己紹介は出来ますか () ()
14. 後期もドイツ語を勉強したいと思いますか () ()
15. 後期は他の外国語を勉強したいと思いますか () ()
16. 会話, ヒアリング中心の授業を望みますか () ()
17. 文法, リーダー中心の授業を望みますか () ()

資料 2 各項目別回答比率

項目・評価	A	B	C	D	E
1	68	26	5	29	0
2	1	21	44	29	5
3	6	28	40	22	4
4	6	35	39	18	2
6a	70	18	11	0	1
6b	24	41	22	10	3
6c	20	45	26	6	3
6d	17	44	31	4	4
7	25	29	35	6	5
8	5	14	33	28	20
9	19	39	30	7	5
10	20	34	35	8	3
11	19	32	11	19	19
12	30	31	25	12	2
13	11	27	34	18	10
14	43	34	16	5	2
15	4	6	21	25	44
16	24	29	37	6	4
17	4	21	44	22	9

表3 出席90%以上、ドイツ語93年度

項目・評価	A	B	C	D	E
1	54	37	5	2	2
2	2	17	47	24	10
3	2	20	48	19	11
4	5	25	48	15	7
6a	73	15	11	1	0
6b	11	44	33	9	3
6c	12	31	44	9	4
6d	10	36	41	9	4
7	13	39	36	5	7
8	6	12	34	27	21
9	11	36	41	7	5
10	16	42	35	3	4
11	14	39	24	12	11
12	23	41	24	7	5
13	7	43	25	14	11
14	38	33	20	2	7
15	5	8	27	25	35
16	20	31	35	8	6
17	10	16	44	16	14

表4 出席90%以上、ドイツ語94年度

項目・評価	A	B	C	D	E
1	60	36	4	0	0
2	1	18	55	23	3
3	5	21	56	14	4
4	5	35	47	9	4
6a	74	13	11	1	1
6b	15	50	22	9	4
6c	12	46	31	10	1
6d	14	38	35	10	3
7	24	37	35	4	0
8	13	14	29	25	19
9	23	30	37	9	1
10	23	29	38	9	1
11	29	40	20	5	6
12	24	38	25	12	1
13	14	37	32	9	8
14	37	37	21	5	0
15	8	8	32	21	31
16	23	22	34	8	13
17	14	19	41	16	10

表5 出席90%以上、フランス語93年度

項目・評価	A	B	C	D	E
1	57	35	5	3	0
2	1	12	38	41	8
3	2	16	48	28	6
4	2	21	51	22	4
6a	67	19	14	0	0
6b	4	43	38	13	2
6c	3	50	35	10	2
6d	6	44	40	9	1
7	17	47	27	8	1
8	7	13	23	33	24
9	12	43	30	11	4
10	18	38	36	6	2
11	17	49	11	12	11
12	8	31	35	14	12
13	0	5	25	37	33
14	28	46	19	6	1
15	4	9	25	26	36
16	17	22	40	14	7
17	4	25	49	13	9

表6 出席90%以上、フランス語94年度

項目・評価	A	B	C	D	E
1	59	20	7	2	2
2	0	15	35	30	12
3	2	17	35	28	9
4	0	30	41	20	9
6a	70	17	13	0	0
6b	32	50	14	0	0
6c	25	62	13	0	0
6d	30	56	15	0	0
7	32	46	14	0	0
8	0	23	27	42	8
9	19	42	38	0	0
10	30	37	30	0	0
11	44	41	7	6	2
12	22	56	19	2	0
13	0	9	41	43	7
14	38	24	6	0	0
15	0	7	24	22	41
16	22	34	29	2	5
17	7	5	51	27	9

表7 出席90%以上、中国語93年度

項目・評価	A	B	C	D	E
1	47	48	5	0	0
2	3	10	58	22	7
3	5	22	41	30	2
4	12	17	44	20	7
6a	80	12	8	0	0
6b	32	57	8	0	3
6c	28	60	10	2	0
6d	27	53	18	0	2
7	30	45	22	3	0
8	10	7	60	13	10
9	33	45	20	2	0
10	40	40	20	0	0
11	40	32	10	13	5
12	23	47	23	5	2
13	5	10	42	30	13
14	58	35	5	2	0
15	0	5	20	35	40
16	33	25	35	5	2
17	3	13	58	23	3

表8 出席90%以上、中国語94年度